

巻頭言

市立甲府病院 内科 小澤 克良

山梨県内での肺癌の統計が我々には入手できない状況なのは残念ですが、市立甲府病院での 2002 年新規肺癌登録 122 例の統計を参考資料として、肺癌診療の現状を考えてみたいと思います。122 例中男性 79 例、女性 43 例、平均年齢 70.5 歳で 80 歳以上が 27 例でした。発見動機は、検診 30 (CT 検診 5)、他疾患経過観察中 38 (CT 9)、自覚症状発見 48 (同なし)、肺癌術後フォロー中 6 各例 (同 4 各例) であり、CT 発見は計 18 例でした。組織分類は非小細胞癌 96、小細胞癌 11、不明 15 各例でした。臨床病期は I 期 50、II 期 9、III 期 38、IV 期 25 各例でした。治療は、手術 56、化学療法 34、放射線 19、対症療法 16 各例で、9 月から使用可能になった Gefitinib は 9 例のみの使用でした。15mm 以下の小型肺癌に対する VATS による迅速診断+手術は 12 例に施行していました。初回化学療法は全例入院で施行し、34 例中 18 例が外来化学療法に移行していました。75 歳以上、PS 不良例では初回から単剤化学療法が施行されていました。

当院は放射線治療設備のない一般市中病院で症例数も少なく、集学的治療を行う上での限界がありますが、今後の方向として、①CT 検診の普及の期待と微小肺癌の治療の確立、②分子標的治療薬使用の対象症例の選定と安全性の確保、③安全な外来化学療法体制の確立、④高齢者肺癌の治療法の確立、⑤定位照射を含めた新しい放射線治療法の利用などに取り組みたいと考えています。他の施設のご意見を伺いたいと思っています。

最後になりましたが、第 29 回山梨肺癌研究会が 2002 年 11 月 16 日に開催され、世話人として担当させて頂きました。一般演題は 12 題でした。近畿大学福岡正博教授の特別講演「肺がん治療の新戦略」では、肺癌治療の最前線と分子標的治療薬の最新情報をわかりやすくご講演頂きました。腫瘍内科学の第一人者にふさわしい講演でした。福岡教授と共に今回お世話頂いた山梨大学第 2 外科の関係者に感謝申し上げます。巻頭言とさせていただきます。